

宝塚市雲雀丘古墳群C北群4号墳出土の須恵器

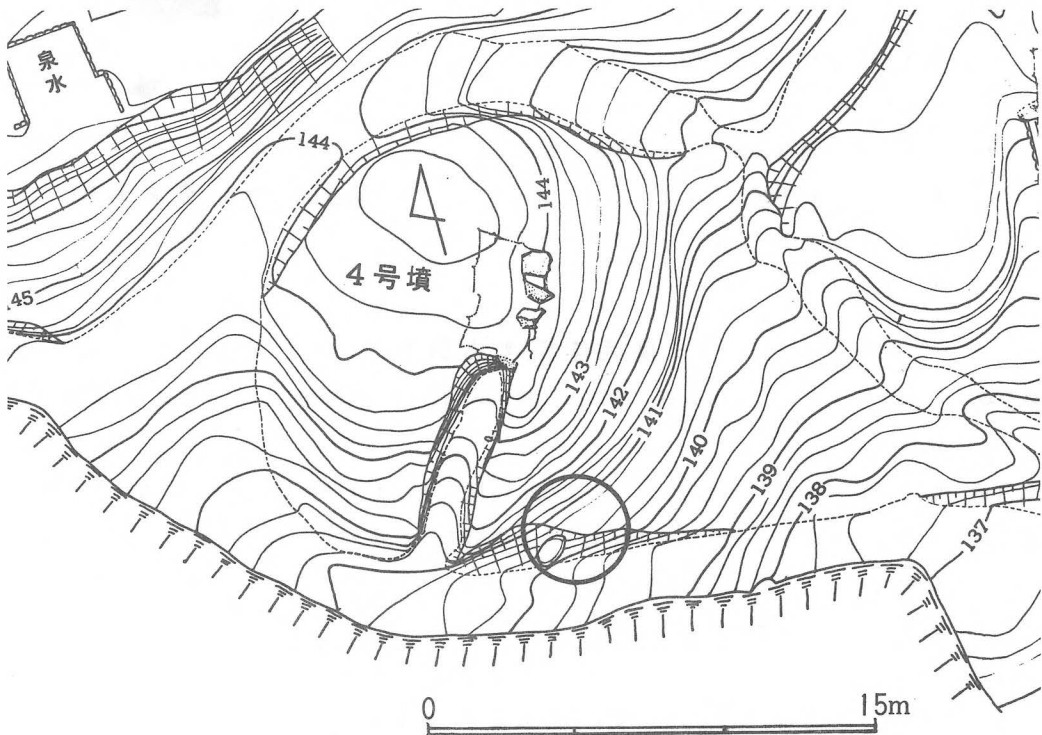
直 宮 憲 一

ある機会で亥野彊氏（関西大倉高校教諭）の所蔵する須恵器が、雲雀丘古墳群C北群4号墳出土のものであることが判明したのでここに紹介する。

記録によるとこの須恵器は昭和38年12月26日に亥野氏の他石野博信氏らが古墳見学中に発見したもので、露頭していたものを採集した由である。完形品ではないが 胴部破片と台付壺が出土している。甕は胴部が残存するだけで明確なことは判明しない。

この古墳はその時の略測図から雲雀丘古墳群C北群4号墳^①と判明したもので、この略測図がなければ出土地付近の現況に大きな変化をきたしているため明確にはなりえなかったであろう。出土場所は石室羨道入口右辺（南側）の墳丘裾部から出土しているが、石室内から出土したものではないので、ただちにこれをもって古墳築造年代を推することはできないが、遺物の出土が知られず手がかりのなかった古墳の年代を推せられる資料として貴重なものである。

形態の明らかなものは台付壺で、器高は不明である。胴部最大径17.6cmを測る。肩部から胴部に入る所に一条の凹線を持ち最大腹部を経てなだらかに底部に至る。外面はロクロによる横ナデを施し仕上げている。また壺部の底部は粗いヘラケズリ後、布でナデて仕上げている。胴部下



第1図 須恵器出土地点（原図『関西学院考古』5）

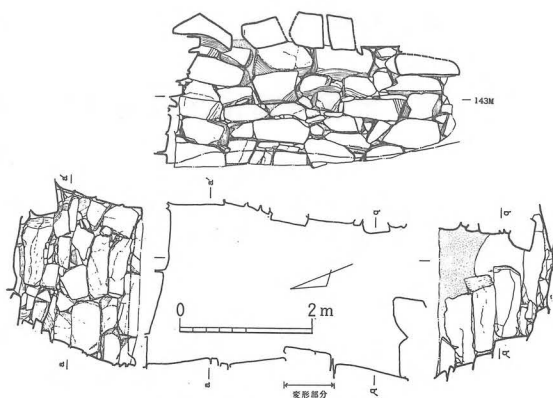
方に横ナデと刷毛による仕様痕を文様状に意識的に残している。台の脚部ははりつけで二段透かしを持っており、はりつけたあとナデで仕上げている。内面奥はしぼり上げている。透かしは外より刺突し切りこんでいる。二段の透かし中央に一条の凹線をもち表はロクロによるナデを行なっている。焼成は堅緻で、暗灰色（外面）、内面は灰色で胎土には石英等の細粒砂を含む。

時期は6世紀前半から中葉のものであろう。

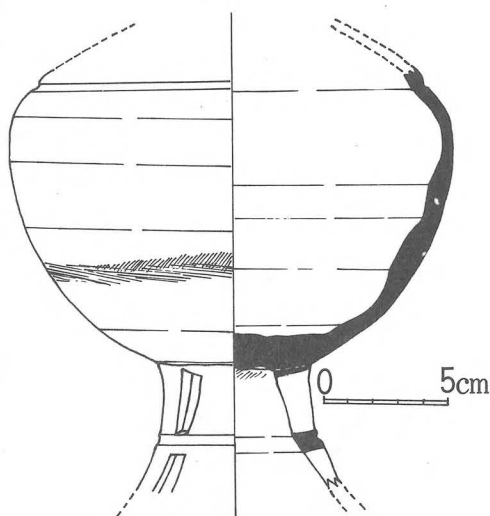
雲雀丘古墳群C北群4号墳は、方形に近いプランとその指数から従来6世紀前半頃の築造と考えられ、雲雀丘古墳群中ではやや古式のタイプに属すると考えられており、雲雀丘古墳群の築造開始時期を考える上でポイントになる古墳であろう。今後の資料の増加がのぞまれる次第である。なお資料提供を御快諾いただいた亥野氏に謝意を表します。

註①関西学院大学考古学研究会「長尾山の古墳群Ⅱ」
—雲雀丘古墳群—（『関西学院考古』No.5
1979年）

②白石太一郎「畿内の後期大型群集墳に関する一考察—河内高安千塚及び平尾山千塚を中心として—」（『古代学研究』42・43合併号
1966年）



第2図 石室実測図



第3図 台付壺実測図

— 関西学院考古既刊 —

第2号 関西学院大学考古学研究会／関西学院構内古墳現状・遺物報告（本文32P、図版7葉）
絶版

第3号 関西学院大学考古学研究会／仁川流域の後期古墳（本文24P、図版13葉） 絶版

第4号 関西学院大学考古学研究会／長尾山の古墳群Ⅰ、折井千枝子・坂井秀弥／西宮市甲風園
採集の弥生式土器、岡野慶隆／横穴式石室の平面形について（本文28P、図版17葉）
頒価¥700（〒共） 残部僅少

第5号 関西学院大学考古学研究会／長尾山の古墳群Ⅱ・西宮市獅子ケ口の須恵器・関西学院構
内採集の須恵器、坂井秀弥／雲雀丘学園所蔵の長頸壺、岡田務／猪名県と畿内の県（本
文34P、図版8葉）頒価¥900（〒共）